

No. 46

ねじればね

June, 1982

昭和57年6月25日 発行
 編集： 後藤 光男
 〒591 堺市百舌鳥西之町1丁目98-2
 大倉南住宅1号棟116号
 電話： (0722) 57局7009番

発行： 日本甲虫学会
 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8
 大倉正文方
 電話： (078) 811局2706番
 郵便振替口座 大阪 9-39672番

標本箱名箋と標本台帳

後藤 光 男

私は本誌34号(昭和49年5月31日)で“カルトンボックスと標本箱名箋”の表題で一文を草し、標本台帖についても言及した。その報文の末尾に名箋と台帖を図示すればよかつたのであるが、カルトンボックスに比重をかけたので、あえて掲載しなかつた。今手許にある先輩学兄(すでに故人の方のものも含む)の名箋・蔵書票を紹介したい。

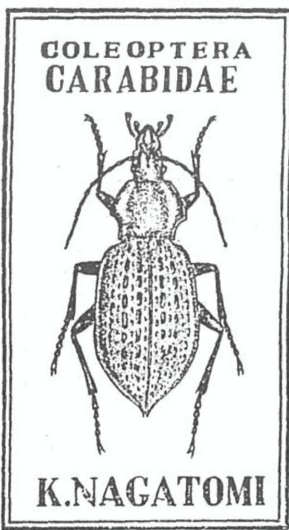
自然破壊によって昆虫の住処も狭ばめられた現在、どこどこで何が採れるという情報が流れれば、虫の数より網の方が多という現状に比べて、当時の採集技術は未熟であつたが市街地やそれに接する地域でも昆虫は豊富であつたので、あまり無理をすることもなく採集ができた。その標本を整理する

過程において図示したような名箋に対しても智恵を絞るという優雅な一面も皆持合せていたものである。

下図は矢野由雄氏のシールをアレンジした名箋であり、2頁が私のものも含めた名箋、3頁が蔵書票とシール、4・5頁は標本台帖の表裏で裏面だけ両面印刷して追加補助用として使用していた。



No.



K.NAGATOMI

CARABINI

No.



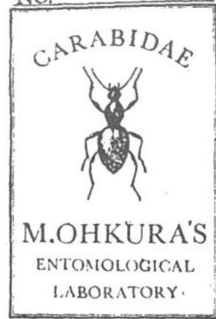
K.NAGATOMI

No.



M.IGA
KYOBASHI 2-2-1
HIGASHIKU,
OSAKA

No.



M.OHKURA'S
ENTOMOLOGICAL
LABORATORY

**CARABIDEN
SAMMLUNG**

NR.



Y. YANO

No.



M.GOTO

No.



M.GOTO

No.



M.GOTO

EX LIBRIS



From a drawing by Edward J. Sullivan

S. FUKUKI

Exchange
Beetles & Butterflies

F. YANO
1178 Mukogaoka Uenoshiba
nr. Osaka City
Nippon.

BIBLIOTHECA ENTOMOLOGICA
S. FUKUKI

EX LIBRIS
K. NAGATOMI

MUKOGAOKA UENOSHIBA near OSAKA
F. YANO
JAPAN

EX LIBRIS
S. FUKUKI

Masafumi Ohkura
Libris

鞘翅目標本目錄

標本箱番号： _____

基本標本番号： _____

科名： _____

學名： _____

和名： _____

原記載文献名： _____

採集地名： _____

採集場所： _____

採集者： _____

採集年月日： _____

同定者： _____

()

分布： _____

記載： ()

採集記録：

採 集 地 名	採集年月日	個体数	摘 要

備 考：

標本箱用のユニットボックスの寸法について(1)

後 藤 光 男

標本箱の中を小箱でさらに細かく間仕切って群や種ごとに整理する方法は、いつの頃に誰が考え出したのか知らないが、用具のカタログに掲載されたのは志賀昆虫普及社のNo. 24(1971, P. 24)で新製品として467 ユニットボックス、白ツヤ紙美装ポリフォーム敷として紹介されたのが初めのようにある。大・中・小・特小の4種類となっていて、その寸法は明示されていない。カタログにその寸法(cm)が明示されたのはNo. 29(1976)からで、大(9.2×14.0)、中(9.2×9.2)、小(4.5×9.2)、特小(4.5×4.5)となっている。紹介された直後に上京したので志賀昆虫普及社に立寄って見せてもらったが、その当時はあまり興味がなかった。その後、芝田太一氏でお名前は忘れたがインロー型標本箱小形にユニットボックスを使った標本を見たことがあるが、どうしても空間ができるのでポリフォームの切れ端でボックスを固定しなければならない難点があるとの話しだった。

大阪市立自然史博物館でユニットボックスを使って整理された標本箱を見てから少しく興味を覚えて作って見た。博物館の標本箱は別註で上下左右に防虫剤を入れる空間があるが、標本箱の内寸法に空間を作らないで収容できる寸法のユニットボックスを作ることも可能である。既製の標本箱では防虫剤の収容空間も必要であるので、この寸法も考慮してインローガラス蓋式標本箱中形用に5種類を作って見た。

用紙は製図・イラストレーション・版下・モデリング等に好適な純白の両面KMKケント紙貼りの中厚イラストレーションボードを見つけて、これを使った。サイズはB1・B2・B3・B4の4種類があって、1.25mmの厚さになっており、ユニットボックスでは貼合せる必要がない厚さである。4種類の中B1とB4が経済的で切断片も少なかった。作り方は本誌第27号(1969, 8-12頁)に詳しく書いた「紙製標本箱の作り方」と同一で、底板に4片を積み上げて貼合せる方法を取り、補強をかねて外側に純白ツヤ紙を貼って底はポリフォーム敷とした。最初に作ったのは防虫剤入れの空間をとらないで内面一杯に詰合せるユニットボックスであったが、モデルとした標本箱では難なく収容できるので、僅かに空間ができる箱や左右上下のいずれかが収容できない箱があることが判った。これは標本箱を購入する時、同じロットであれば外寸法・内寸法ともあまり違いはないのだが、ロットが違えば寸法に違いができ0.5~2.0mm程度の差があることが判った。この収容不可能の欠点をなくすことと防虫剤入れの空間をとることで上下と左右に各々2.5~5.5mmの空間をもたせる寸法で作り直してみた。

次表が白紙に標本箱の実寸を線引して割り出した寸法表である。この表で見るとき4種の標本箱の外寸法については関連がないように思った。

志賀昆虫普及社製 インローガラス蓋式標本箱 (単位cm)

	特大形	大形	中形	小形
外寸法	39.7×30.0×6.2	35.8×26.7×6.2	30.8×20.8×6.0	21.4×15.3×6.0
内寸法	37.5×27.6×4.1	33.6×24.5×4.3	28.9×19.1×3.5	19.0×13.0×3.9
有効寸	36.0×26.0×4.1	33.0×24.0×4.3	28.0×18.0×3.5	18.0×12.0×3.9
(A)縦2割	18.0×26.0	16.5×24.0	14.0×18.0	9.0×12.0
(B)4つ割	18.0×13.0	16.5×12.0	14.0×9.0	9.0×6.0
(C)8つ割	9.0×13.0	8.25×12.0	7.0×9.0	4.5×6.0
(D)16割	9.0×6.5	8.25×6.0	7.0×4.5	4.5×3.0
(E)32割	4.5×6.5	4.125×6.0	3.5×4.5	2.125×3.0
志賀昆虫普及社 カタログ				
467 ユニットボックス 大 9.2×14.0 中 9.2×9.2				
小 4.5×9.2 特小 4.5×4.5				

私が中形をモデルにしたのは、所持している標本箱の過半数以上が中形であるため、他に特大形小形とドイツ型標本箱の中形を持っている。中形の空間を左右9mm, 上下11mmにしたのは割切り易い数字を考えたからに外ならない。中形4つ割(B)の寸法が志賀製のユニットボックスの大に非常に近いが、2mmを計る手間を省いたため9.0cmの設定となった。案外志賀昆虫普及社でも寸法の割出しはガラス蓋式の中形と甲虫専用の小形あたりに基準を定めたのではないだろうか。志賀製の高さは何センチか知らないが、博物館では3.5cmとしており、私は4.0cmとして見た。針の頭は3.5cmではボックスの上部より出ており、4.0cmでは上部とスレスレである。4.0cmではドイツ型標本箱の場合、コルク敷では不便はないが、ポリフォーム敷では底敷の厚さが6mmあるので蓋が締まらず高さは3.0~3.5cmとすべきかも知れない。

ドイツ型標本箱の中形に私製ユニットボックス中形用を詰合せた結果はつぎのとおりとなったが、どの標本箱にでも共通して使える寸法を割出すのは仲々むずかしいように思えた。

	横	縦	収容箱数	上下空間	左右空間	左右空間詰合せ
(ポ)	18×7	8箱	2	3.5	3.5×4.5	6箱
(ポ)	9×7	16"	2	3.5	3.5×4.5	6箱
(コ)	9×7	16"	2.1	3.4	狭間のため不可	
(ポ)	7×9	15"	3	4.5	4.5×3.5	8箱
(コ)	7×9	15"	3.1	4.4	3.5×4.5	6箱

単位=cm ポ=ポリフォーム敷 コ=コルク敷

標本箱の外寸法が同一であっても細工によって内寸法が違うので、かなりの空間ロスが生じる場合があることを知った。

市販のユニットボックスを使用するのなら別であるが、自分で作ったり用具店で作らせたりする場合には縦または横の台紙貼標本の寸法も考慮する必要がある。台紙貼標本の寸法と頭数から割出した最小のボックス寸法の倍数で寸法設定をするのが一番無難と思われる。

ユニットボックスを使用しない整理標本を5種類のユニットボックスを使って詰合せた場合に、その収容力の減じるのは当然である。それがどれ位の標本箱を追加する必要があるのかは収容頭数にもよるけれども、まだ考えたことはない。

四っ手網は誰が初めて作ったのだろうか？

後 藤 光 男

ある会合で「大阪では誰が初めて叩網（四っ手網）を使ったのですか」との質問を受けたことがある。私もこのことについて一度確かめたいと思ったが、戦前から昆虫を採集していた私は最初から四っ手網を使っていたので、随分昔から使われていたようである。武道具店で竹刀の半端物を買ってきて作ったが、大倉正文氏は専用のコウモリ傘であった。これは今ではまったく見ることはできないが、あれば文化財的の価値があると思われる。用具店では四っ手網は売られていないで、すべてコウモリ傘式であった。外観は今のコウモリ傘と同じであるが、違うところは骨部と握手の中間がフレキシブルで自由に折り曲げることができるようになっていた。布は白地で大きさは子供用のコウモリ傘位だったと記憶している。四っ手網は扁平なので、かなりの繁みでも自由に差入れることができるが、コウモリ傘は丸味があるので、どこにでも使用するわけにはいかない欠点があった。

先般所用があつて帝塚山の矢野由雄氏を尋ねた時、雑談となつてから例の叩網のことを聞いて見た。矢野氏の話では「いつ誰によって考案されたものか知らないが、大阪で初めて使ったのは私と福貴正三氏です」との答えて、更に「当時叩網といへば、すべてコウモリ傘式で、捕虫網を代用している人もいました。当時大阪の同好者間では私のオサ・ゴミの標本と戸沢信義氏の“歩行虫の智識”の影響でオサムシ熱・ゴミムシ熱が最盛期で、叩網を使って甲虫類を採集する人はほんの数えるほどしかいませんでした」と言葉を続けられた。

用具のいろいろについて、そのルーツを探るのも興味があることと思つている。

昭和56年度収支計算書（昭和56年1月1日から12月31日まで）

収 入 の 部		支 出 の 部	
会費	1,358,850円	印刷費	1,876,000円
バックナンバー代	189,900	通信費	276,710
別刷代	74,950	消耗品費	37,000
寄付金	4,000	大会費	41,600
函鑑印税*	92,506	幹事会費	16,245
雑収入	98,226	雑費	9,040
仮受金	90,000	仮受金引当金	90,000
預り金	500	預り金引当金	500
前期繰越金	1,017,988	次期繰越金	579,825
計	2,926,920	計	2,926,920

* 現在までに学会へ繰入れられた印税合計 2,074,952 円

特別会計収支計算書（会報発行基金）

昭和56年	1. 1	前期繰越金		1,048,194 円
	1. 20	45万円貸付信託収益金 (55. 7.20～56. 1.19)		12,607
	3. 26	金銭信託収益金 (55. 9.26～56. 3.25)		6,744
	5. 20	40万円貸付信託収益金 (55.11.20～56. 5.19)		11,206
	7. 20	45万円貸付信託収益金 (56. 1.20～56. 7.19)		11,583
	9. 26	金銭信託収益金 (56. 3.26～56. 9.25)		5,437
	11. 20	40万円貸付信託収益金 (56. 5.20～56.11.19)		9,906
	12. 31	次期繰越金		<u>1,105,677</u>

新 入 会 員



住 所 変 更





— 価値ある標本をより高く —

シーズンオフに具えて標本の整理には、当学会によって永年の経験を
生かして作られた、使い易いラベルのご利用をおすすめします。

見本は本誌44号の12頁に掲載しています。紙質は90~110
Kの上質白紙です。

ラベル印刷用4.5ポ活字セットも新たに2組揃えました。

— 用具等のご照会は後藤まで、お問合せ下さい。 —

— あ と が き —

国内の各学会誌の発行がやや鈍化の傾向にあるようですが、前号で述べました発行の正常化に向って鋭意努力をしています。いくら編輯陣が力んで見ても肝心の原稿が寄せられなければ正常化のレールを走ることはできません。短報を含めて多数の方々の投稿をお待ちしています。

今年は四季の移りかわりは今のところ順調のようですが、このまま秋・冬へと向ってくれないかと希っています。いろいろ計画は人並にしているのですが、以前の職場と違って対人関係に終始する毎日ですので、計画の消化がどれだけできるかは、結果を待たないと判りません。今年中に37巻を完了させたいと思っています。（国民登録背番号51030）